

平成二十七年 度

入 学 試 験 問 題

国

語 (前期)

(七 十 分)

智 辯 学 園 和 歌 山 中 学 校

注 意

- ◎ あい ず が あ る ま で、問 題 用 紙 に 手 を ふ れ て は い け ま せ ん。
- ◎ 答 え は す べ て 解 答 用 紙 に 書 き な さ い。
- ◎ 解 答 用 紙 に は、名 前 を 書 か ず、受 験 番 号 だ け を 書 き な さ い。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 動物と話せる男の異名をもつ宮崎学さんは世界的な動物写真家である。信州の伊那谷に生まれ、子供のころから伊那谷のサンヤを駆け巡り、現在も伊那谷に腰を据えて野生動物の驚異的な生態を記録しつづけている。

その宮崎さんに会いに行つてさまざまな撮影現場を案内してもらったとき、最近かまびすしい野生動物保護にかんしての、もう一つの視点^②とでも呼ぶべき物の見方を教えられたような気がした。

まずはオオタカの巣である。何と、人家に近い赤松林のなかにあった。ひっきりなしに車がオウライする高速道路から（A）と（B）の先ののだ。

ワシやタカなど警戒心の強い猛禽類を自然な姿のまま撮影するのは難しい。

① その巣の発見となると専門家でも至難のわざ……。少なくとも二十余年前、宮崎さんがノスリ、オオタカと次々に巣を発見し撮影に成功するまで、そう思われていた。古来より鷹狩りに使用され、その気品に満ちた風貌から「タカの王者」と目されてきたオオタカの場合、必ず「（C）の」とか「滅びゆく」とかの形容がなされていたものだ。ところが宮崎さんはそのオオタカの巣をこれまで一人で二十近く見つけてきた。現在、伊那谷で観察を続けているだけで五つのつがいがいる。

「オオタカはワシ・タカ類のなかでは一番学習能力、環境適応能力があるんです。幻^③どころかごく普通のタカ、数も増えています」

こともなげにいうのである。

あらゆる動物にとって繁殖のための最重要条件となるのは安全な栖と豊富な餌、
② 住と食の確保である。オオタカの営巣地は葉群が二重構造になった樹林だが、これが全国的に急速に増えている。林業の不振によつて下草刈りや枝打ちを施されることなく放置された山林がいたるところに出現したのだ。オオタカにとっては絶好のマンションである。そして餌。オオタカはドバト、ムクドリ、オナガ、コジュケイなどを獲物としているが、これらの野鳥は農村の都市化にもなつて大量に繁殖している。結局、現在の環境はオオタカにとって願ってもないものののだ。

「ヒナのときから高速道路の騒音を聞き、頻繁に行き来する人間や自動車を見てるわけですからね。彼らは最初から現代文明とのつきあい方を学習してる新世代なんですよ」

宮崎さんは車道の脇に立つて赤松林を見上げた。そこは赤松や杉の枝に覆われ鬱蒼としていたが、目を凝らしてチュウシすると、枝の地上十五メートル付近に直径一・二メートルほどの巨大な巣が隠れていた。

予想以上に優れた動物の環境適応能力は、次に案内されたフクロウの巣でも感じた。巣は人家から二キロ近く離れた里山の尾根の松の樹洞にあるが、そこに小型マイクを取り付けた宮崎さんによれば、樹洞は非常に高性能な集音ソウチなのだという。巣に近づく動物たちの足音が手に取るように識別できるのはもちろん、里の人家で飼っている犬の吠え声やラジオの音までよく聞こえる。そんな樹洞で生まれ育ったフクロウが、人工の光や音を恐れず町中に飛来してきて、人家周辺のネズミ（多い！）を襲うのは当然のことなのだ。

宮崎さんはデビュー作『けもの道』で、驚くほど多くの動物が人間と同じ道を使用していることを

証明し世間をアツといわせた。宮崎式ロボット・カメラが設置されたのは、郵便配達夫がバイクで通う人家のすぐ裏の山道だったが、そのカメラには十四種の哺乳動物と十二種の野鳥が写っていたのである。写真集が出版されるまでそこに暮らす地元の人びとさえ誰一人気づかなかったことだ。

これら多くのフィールドでの観察と実験的撮影から導き出される結論は一つ、今日の自然界に生きる野生動物たちに、人工物を拒否する個体はいない、ということである。

むろん、人間の行う開発が野生動物の生息域を奪い破壊してしまうということはある。とくに大規模で急激な開発はそうだ。宮崎さんもそのことは憂慮している。3 重要なのは、動物たちはわれわれが考える以上に賢くしたたかであり、「開発で急減し姿を消す動物もいれば、逆に増える動物もいる」という事実だ。動物たちは人間がつくりだした人工的環境をすでに所与の条件として、それぞれの生き残り策を模索しているのである。

野生動物の保護というと、一部の保護団体のようにオール・オア・ナッシングの感情論に傾きがちだが、いま必要なのは、先入観を排して野生動物の生態が現実になっっているのか、地道な観察と粘り強い調査を開始することだろう。

伊那谷を去る前、宮崎さんは僕に「もうじき東京でハヤブサが見られますよ」といった。

ハヤブサは一般に海岸の断崖などに巣をつくるが、上昇気流があれば高層ビル街でも生息できる。現にニューヨーク市のビル街では以前から繁殖している。そして、新宿副都心のビル街には餌のドバトがゴマンといるのだ。

〔ビル街のハヤブサ〕足立倫行

(注) 1 かまびすしい……騒がれている。

2 猛禽類……鋭いつめとくちばしを持つ鳥類の総称。

3 所与……与えられているもの。

4 オール・オア・ナッシング……すべてか無か。妥協を許さない立場や決意をいう。

問一 部(ア) (オ)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 () 部A・Bにそれぞれ体の一部を表す漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

問三 () 部Cにはどんなことばが入るか、本文中より漢字一字で抜き出して答えなさい。

問四 部1-3にはどんなことばが入るか、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返して使ってはけません。

ア なぜなら イ つまり ウ ましてや エ あるいは オ しかし

問五 部①「動物と話せる男」とあるが、これはどういう人のことを表しているのか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 野生の動物の行動を先読みし、次にどこに現れるかを瞬時に判断できる人。

イ 野生の動物が住む環境を破壊し、むやみに開発を進める人たちに抗議する人。

ウ 野生の動物と意思を通いあわせることで、弱い立場の彼らを守ろうとしている人。

エ 野生の動物と実際に関わることで、その行動や生息状況を的確に理解している人。

問六 部②「何と、人家に近い赤松林のなかにあった」とあるが、この部分には筆者のどのような思いが込められているか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今までなんとしてでも姿を見てみたいと思い続けていたオオタカにはじめて出会えたことへの感動。

イ 自然界でもめったに出会えないはずのオオタカが人の居住地域の間近で生息していたことを知った驚き。

ウ すでに滅びてしまったものとすっかり思いこんでいたオオタカが思わぬ所で生きていたことへのとまどい。

エ 不便な所にしか住まず、出会おうと思っても大変な苦勞を強いられたオオタカにこれからは気軽に会えるという喜び。

イ 自然界でもめったに出会えないはずのオオタカが人の居住地域の間近で生息していたことを知った驚き。

問七 部③「数も増えてます」とあるが、オオタカが増えるきっかけとなった社会の中での移り変わりを表すことばを本文中より二つ、それぞれ五字と六字で抜き出して答えなさい。

問八 部④「そこに暮らす地元の人びとさえ誰一人気づかなかった」とあるが、それはなぜだと考えられるか、説明しなさい。

だと考えられるか、説明しなさい。

問九 部⑤「そのこと」とあるが、これはどのようなことを指しているか、説明しなさい。

問十 部⑥「動物たちはわれわれが考える以上に賢くしたたかだ」とあるが、筆者は「動物たち」のどのようなところを「賢くしたたか」だととらえているのか、説明しなさい。

問十一 この文章が書かれた約二十年前に比べると、最近では人間と野生動物の関係に変化が見られ、様々な問題が起こっています。そのような具体例をあげて、人間と野生動物の関係がどうあるべきか、あなたの考えを二百字以内で書きなさい。

〔二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ケンジの村に、山はない。ケンジの村に、海もない。あるものといえば、視界の八割を占める田んぼと空と、村の中を流れる一本の小川だけだ。それはそれは退屈な景色だったけれど、子どもたちは飽きることなくその中を走り回った。

(a) 土曜日の帰り道、アキラは地蔵橋の上で立ち止まった。そして、みんなが集まったのを確かめると、もったいぶって、こういった。

「明日、川ざらいがあるぞ」

「本当か？」

①と、マサアキが目玉を輝かせた。

「ああ、父ちゃんがいつてたからまちがいない」

アキラの父は農事組合長をやっていたので、その情報にまちがいはなさそうだった。

「やったー」

子どもたちは、口々にそう叫んだ。

川ざらいというのはかんたんといえば、村の中を流れるシジミ川の掃除だ。しかし、掃除といってもゴミだけを拾うわけではない。川岸の草や、川底にたくさん生えた藻を刈り取るのだ。大人の川掃除に子どもが大喜びするのは妙なことだが、この川ざらいは、子どもたちにとって、一年に一度の大イベントだった。幅三メートルほどのシジミ川を、村中の大人が草や藻を刈りながら下流から上流へと歩く。小川は五十人近い大人に踏み荒らされ、クワやスコップでかき回される。そのために、いつもは清水が沸いて透き通っている川の水が、泥水になってしまふのだ。泥水になると、酸欠になった魚がプカプカと流れに浮く。また、運悪く踏みつけられてしまった魚も①と浮き流されていく。その魚が、子どもたちのねらいだった。

「今年は、大漁かなあ」

アキラがいった。

「アキラ、心配するな。大漁だよ」

マサアキが答えた。

「梅雨で雨がいっぱい降ったから、ヒョウタン池から大物が②上がってきてるらしいよ」

ケンジも、自信ありげにいった。

「本当か？」

「本当、本当。③の取り放題だあ」

「うっひょー」

アキラとマサアキが興奮して奇声を発すると、まわりの下級生がクスクスと笑った。

それから、子どもたちは、またゆつくりと歩き出した。小学校から桑原村までは、約二キロの道で、地蔵橋はちょうどその中間にあった。桑原から小学校に通うのは、十人。一年三人、二年一人、三年二人、四年がいなくて、五年が一人、それから、六年生のアキラとマサアキとケンジの三人だった。もちろん、これは男だけの数である。男と女は、離れて歩くことが常だった。学校の先生は、「男

— 4 —

子も女子も並んで歩くように」などといっていたが、そんな格好悪いことは彼らにはできなかった。なにが格好悪いのかは問題ではなく、一年生のときから六年間ずっとそうしてきたわけで、いままら女と一緒に歩くことなど、男の名折れだと思っていた。

「アキラ。今年は思うぞんぶん、網持ちがやれるな」

「おう、去年はバケツ持ちだったからな」

先頭を歩くアキラとマサアキが、いつもより大きな声で話すのを、すぐ後ろでケンジは聞いていた。

二人のぺちゃんこのランドセルが、弾むように揺れている。

「ケンジ、明日は取るぞー」

振り返ったアキラが、にかつと笑った。

「任せとけ！ でもさ……」

ケンジには、気がかりなことがあった。

「なんだよ、ケンジ。浮かない顔してさ」

「うん……バケツ持ちだよ」

川ざらいの日のバケツ持ちは、毎年、四年生と五年生がやることに昔から決まっていた。それなのに今年は、四年生がおらず、五年生はタクヤ一人しかないのだ。川ざらいで取れる魚は、バケツに四杯にも五杯にもなる。このことはタクヤ自身、よくわかっていたようで、さつきからずっと元氣のない顔をしていた。

「タクヤ、一人でバケツの四つぐらい持てないか？」

物事を深く考えないアキラは、平気な顔でそういった。

「……」

年下のタクヤは、「できません」といえるはずもなく、黙ったまま下を向いた。

「アキラ、むりだよ」

ケンジが、見兼ねてそういった。

「そうか、やっぱりむりだよな」

水と魚の入ったバケツを、四つも持って歩きつづけることがむりなことは、アキラでなくともすぐにわかった。

「じゃあ、どうする？」

「どうしよう」

「三年生は？」

「三年ぼつこにバケツはむりだよ」

「そうだな」

「仕方ない、俺たちが持つか？」

アキラの言葉に、マサアキが強く反発した。

「いやだよ。去年も一昨年もバケツ持ちだったんだ。今年は、網を持つんだ」

「そうだよな」

「それに、四年と五年がバケツを持つのは、ずーっと昔から決まっていることなんだ。俺たちが、そ

— 5 —

の決まりを破ってもいいのか」

マサアキの言葉に、みんな黙り込んだ。マサアキだけでなく、アキラやケンジだって、ずっと六年になって網を持つのを楽しみにしてきたのだ。

「だからさ、ここは五年生のタクヤに、がんばってもらうしかないよ。五つはむりでもさ、三つぐらいは、なんとかならないか」

③ マサアキは、決してタクヤの顔を見ることなく、そういった。

「そうだな、疲れたら俺たちが手伝ってやるって。大丈夫だな、タクヤ」

「……うん」

アキラの声に、タクヤが小さくうなずいた。しかし、ケンジはタクヤの顔を見ることができなかった。手伝ってやるというものの、実際、川に入って魚を目の前にしたら、バケツ持ちなんか進んでやる奴は絶対にいない。そんなことは、わかりきっていた。去年だって、一昨年だって、六年生は目の色を変えて、魚を追い回していたのだ。

「バケツはさ、水に浮かべれば軽いから、四つくらい持てるよ」

「一つは、首にぶら下げてもいいな」

「ひやつ、ひやつ、ひやつ」

マサアキもアキラも、もう、他人事のように笑いつづけた。ケンジは、横を歩くタクヤの顔をちらりと見た。タクヤは、前を歩く二人の白い運動靴のかかとをにらみつけたまま、黙って歩いていった。前を歩く六年生と、後ろでなにも知らずに笑っているチビ共にはさまれて、タクヤは独りぼっちだった。ケンジは、哀れな五年生の横を、なにもしてやることもできず、黙ったまま村まで歩きつづけた。村に入り、シジミ川にかかる新橋までくると、子どもたちは別れ別れになった。

「いいかー。あしたは八時だぞ。絶対に遅れるなよ」

アキラの声に、全員がうなずいて家へ向かった。

ケンジは、タクヤと川沿いの道を並んで歩いた。川には何種類もの水草が生え、水の流れに身を任すように横たわる。しかし、川幅にくらべて明らかに水草の量が多く、流れる水も窮屈そうだった。そして、ところどころ、水草の生えていない場所があり、そこにはかならず白い砂が見えた。清水の沸く穴だった。シジミ川は、歩くと濁る泥底だったが、清水の沸くところだけは白い砂底で、水もゆらゆら揺れているように見えた。

「ケンちゃん。バケツ、いくつ持てると思う？」

タクヤが、ぼつりといった。

「二つかなあ」

「四つはむりだよね……」

やはり、タクヤは明日のことが心配で仕方ないようだった。二人は洗い場のところまで歩いてくると、石段に腰を下ろした。

「なあ、タクヤ。バケツ持ちは僕が手伝うよ」

心配そうなタクヤの姿に、たまりかねたケンジがいった。しかし、タクヤは小さく首を横に振ると、こういった。

「だめだよ。そんなことしたら、アキラくんたちとケンカになる」

「関係ない」

「……うん。ケンちゃんがさ、アキラくんたちとケンカするのいやだよ」

④ それを聞いて、ケンジは、年下のタクヤを守ってやりたくなった。

「いいから。バケツは僕が持つてやる」

「だめだよ。それに、そんなことアキラくんが許さないよ。アキラくんが許したって、マサアキくんが絶対に許さない。ケンちゃんが、仲間外れにされちゃうよ」

確かにタクヤのいうとおりだった。しかし、ケンジにも六年生としてのプライドがある。

「なんとかしてやるよ……」

しかし、そういつては見たものの、その言葉に（A）はなく、二人とも、なんともならないであろうと感じた。そして、二人は、また黙り込んだ。太陽は真上まで上がり、二人ともお腹がすくのを感じた。しかし、なかなか立ち上がる気にはなれなかった。

「なあ、タクヤ。昼から、ドンコ釣りやるか？」

⑤ 「うん、今日はやめとく」

「そうだよな……」

それから、タクヤは立ち上がり、ランドセルをぐいと背負い直すと、柿の木の前へ走り去った。石垣の前にある柿の木は、曲がりくねった枝に黄緑色の葉をたくさんたくわえている。

ケンジは、しばらくの間、タクヤの消えていった路地を眺めていたが、振り返り、また川を眺めた。

（タクヤは、いったいどうするのだろう……）

（ひよつとしたら、明日の川ざらいには、来ないのではないか……）

静まり返った真昼の川面を見つめて、そんなふうに思った。

「あつ……」

⑥ ケンジが、小さな声をあげた。銭亀だった。対岸をゆつくりと銭亀が流れてきたのだった。銭亀というのは、牛乳ビンの蓋ほどの小さな亀で、硬貨に似ているからそう呼ばれている。正確に言えば石亀の子どもだ。この銭亀をなでるとお金持ちになれるともいわれていた。

ケンジは、黙ったまま銭亀を眺めた。いつものケンジなら、ランドセルを投げ捨てて川に飛び込んでいただろう。しかし、今日はそんな気分ではなかった。きれいに澄んだ水の上を、滑るように流されていく銭亀の姿は、気持ち良さそうに思えた。しかしよく見ると、その姿のどこにもゆとりはなかった。流れては岸辺の水草につかまり……流されてはまた、つかまる。

ケンジは土手の上から、遠く離れて、その動きを見守った。そして、大きくゆつくりと動く水草と、銭亀の姿を見ながら、明日の川ざらいのことを思った。

（明日、この川は何十人もの大人に踏まれて、水草が刈られる。銭亀は、いったいどうなってしまうのだろうか。逃げ切れるのか、捕まるか。それとも、誰かに踏み付けられてしまうのだろうか？）

ケンジは、座り込んだまま銭亀のつくる小さな波紋を、いつまでも見守っていた。

（『見えない敵』阿部夏丸）

問一 ～～～部(a)「もったいぶって」・(b)「浮かない」の意味として最も適切なものをそれぞれ次のの中から選び、記号で答えなさい。

(a)「もったいぶって」

ア 話をするのがむだであるという気持ちで。

イ たいそうなことであるような態度をとって。

ウ 自分だけの秘密にしておきたいという様子で。

エ どうにもうれしくてたまらないという表情で。

(b)「浮かない」

ア 興味が無い。

イ 体調がよくない。

ウ やる気がない。

エ 気分が晴れない。

問二 部1～3にはどんなことが入るか、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返して使ってはけません。

ア おろおろ イ ヘロヘロ ウ ガバガバ エ じゃんじゃん

問三 A君は、この小説を読んで、本文の部分を放送劇にしようと考え、次のように場面を設定しました。 ①～④に入る最も適切なことばをそれぞれ本文中から指定の字数で抜き出して答えなさい。

1 ナレーター(語り手)によるケンジの村の紹介。

2 ① (三字)の上での子供たちの会話。

3 ① ② から ② (二字)へ歩く子供たちの会話。

4 ② ③ から村の洗い場までと、洗い場の ③ (二字)でのケンジとタクヤの会話。

5 一人になったケンジの、タクヤや ④ (二字)についての思い。

問四 (一)部Aに入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 演技力 イ 説得力 ウ 純真さ エ 真剣さ

問五 本文に描かれた場面の時期として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三月ごろ イ 五月ごろ ウ 七月ごろ エ 十月ごろ

問六 ——部①「マサアキが目玉を輝かせた」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問七 ——部②「子どもたち」とあるが、「川ざらい」で魚を捕ることへの「子どもたち」の関わりかたの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 魚捕りの役割分担は高学年ですが、低学年の子も高学年の子と同様に川ざらいの日が来るのを楽しみにしている。

イ 男子も女子も、低学年の子も高学年の子も一つにまとまって、大人たちに混じって魚捕りをするのを心待ちにしている。

ウ 魚捕りにまだ参加できない低学年の子も、高学年の子の活躍ぶりを見物したあと、獲物が分配されるのを待ちこがれている。

エ 年齢や性別の違いに関係なく、誰もが一生懸命に大人たちの手助けをして村の伝統行事を無事成功させようと張り切っている。

問八 ——部③「マサアキは、決してタクヤの顔を見ることなく、そういった」とあるが、この時の「マサアキ」の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かわいそうな立場に追い込まれている「タクヤ」に同情する気持ち。

イ ここぞとばかりに自分の上級生としての威厳を示そうという気持ち。

ウ 無理難題を押しつけようとしている自分にやましさを感じる気持ち。

エ 五年生にもなるのにあまりに頼りない「タクヤ」を軽蔑する気持ち。

問九 ——部④「ケンジは、年下のタクヤを守ってやりたくなった」とあるが、「ケンジ」がそういう気持ちになったのはなぜか、説明しなさい。

問十 ——部⑤「ううん、今日はやめとく」とあるが、「タクヤ」がこう答えたのはなぜか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 翌日の「川ざらい」のバケツ持ちの仕事がどうなるのかが気がかりで、「ドンコ釣り」どころではなかったから。

イ 自分のせいで「ケンジ」が「アキラ」とちと気まずい関係になったため、「ケンジ」と一緒にいるのが辛かったから。

ウ 「ドンコ釣り」をして今日のうちに楽しむと、明日の「川ざらい」での喜びがそれほどではなくなってしまうから。

エ 今日「ドンコ釣り」をすることで、「川ざらい」の漁獲を減らすのは六年生に対して申し訳ないと思ったから。

問十一 ——部⑥「銭亀だった」とあるが、ここでの「銭亀」の話は本文においてどのような役割を果たしていると考えられるか、解答欄の形に合うように説明しなさい。

【三】 次の①～⑤の漢字と画数が同じものをそれぞれ後のア～カの中から選び、記号で答えなさい。

① 版 ② 尊 ③ 第 ④ 益 ⑤ 飛

ア 源 イ 勉 ウ 強 エ 画 オ 級 カ 割

【四】 後の語群の漢字を組み合わせ、次の①～③の意味を持つ四字熟語をそれぞれ作りなさい。

- ① もつてのほかであること。
- ② だけれどもよく思われようと愛想よくふるまうこと。
- ③ 人の意見などを気にも留めず聞き流すこと。

【語群】 語・馬・方・断・耳・人・風・八・道・東・美・言

【五】 次の1～3の①・②の空欄の片方にはA、もう一方にはBを補うとすると、どのように入れるのがよいか、それぞれの空欄に入ることをA・Bの記号で答えなさい。

1 A ふれた B さわった

- ① うっかり汚れた手で食べ物に（ ）。
- ② 幸運なことに自分の作品が専門家の目に（ ）。

2 A ふくらむ B ふくれる

- ① 中学生活への希望が（ ）。
- ② ごちそうを食べて腹が（ ）。

3 A いつわる B あざむく

- ① 若いと思われたくて年齢を（ ）。
- ② 兵士が少ないように見せかけて敵を（ ）。

平成二十七年 度 国 語 解 答 用 紙 (前期)

「句読点」や「かぎかっこ」なども、一字として数えます。

問一	ア	イ	ウ	エ	オ
----	---	---	---	---	---

問二	A	B	問三	問四	1	2	3
----	---	---	----	----	---	---	---

問五	問六	問七	問八	問九	問十
----	----	----	----	----	----

問八	問九	問十
----	----	----

問九	問十
----	----

問十

問十一

問一	a	b	問二	1	2	3
----	---	---	----	---	---	---

問三	①	②	③	④	問四	問五
----	---	---	---	---	----	----

問六

問七	問八	問十
----	----	----

問九

問十一	読者に	と感じさせる役割。
-----	-----	-----------

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

①	②	③
---	---	---

1	①	(	②	(	2	①	(	(	②	(	3	①	(	(	②	(	(
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

受験番号

得 点
